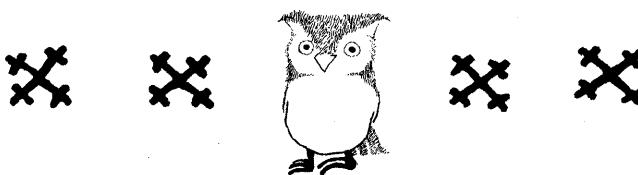


# 私が幼児教育を志した頃(2)

津守 真

昭和二十年秋

昭和二十年秋は、日本人の近代史にとつて特別な時期だったと思う。当時を生きた人にとっては、戦争に明け暮れていた日々から突然に解放されたが、次の生活が始まはじまらないという中間の時期だった。毎日は食糧の調達に追われながら、真剣に過去を考え、未来を思っていた点は、人々に共通だったと思う。そのような歴史の転換期に、生涯のどの時期で遭遇したかによつて、時代の体験の仕方は違つだらう。私は二十歳になる直前で、社会生活の出発点にあつた。その後の五十数年を顧みるに、





## 大学の再開

あの時期に心に深く突き刺さったことがいつも私の心の奥に留まつていて、それを抜きにして私の仕事も人生も考えることはできない。私の父は、敗戦と共に会社を辞めて、それから八十七歳で死ぬまで三十年以上、家にいてひたすら聖書を読み、孫たちの相手をして過ごした。父の会社が戦争中に軍の仕事をしていて、父はそれを恥じた。息子は人を殺す仕事でなく、人を生かす仕事をやれと言つて、私を励ましてくれた。私にとつて何よりも有難いことであつた。

大学が再開されたらしいと知つて（その頃は情報網も不足していた）、私がはじめ大学にいったときには、講義が再開されたばかりで、たしか昭和二十年十月末だった。当時は文学部アーケードに開講科目と教授名が、大きな細長い紙に筆で書いて貼り出されていた。いまでも記憶しているのは、和辻哲郎教授の「世界史の反省」という題目だった。つい半年前の四月には、日本精神史における三種の神器——鏡と剣と玉——について微細にわたる解釈が毎週続いていた。現在の私だったら興味深く読めるのに、その頃のノートは紛失して手元にないのを残念に思う。戦争が終わつたとたんに、「世界史の反省」と講義題目が書き換えられたことに、私は釈然とせず、この講義には出席しなかつた。いま考えると若気の無思慮で申し訳なかつたと思う。



私は心理学科の学生だったので、専ら専門の講義、実験、ゲシュタルト心理学、統計学などが主で、久しぶりに学問的雰囲気にどっぷりと浸つて満足だった。多分皆同様に感じていたと思う。毎日のように、復員して来た先輩、同輩たちがカーキ色の軍服姿で教室にあらわれた。昭和十七年頃から学籍はあつても軍隊にいっていた先輩たちが、続々と学園に戻つて来た。本屋には書物もなく、神田の岩波書店の前には新刊書が出る日には、早朝から列をつくつて西田幾多郎など新しい本を買い求めたものである。教室の窓は爆風で破れたままで寒風が吹き通した。皆外套を頭から被つて、学間に飢えたようにノートをとつた。何はともあれ、毎日自分のペースで歩いて大学に通う落ち着いた生活がうれしかつた。先生たちの外套は軍隊のとは違つて灰色だつたが、外套に身を包んだまま黒板に字を書かれた。まだ自分の専門が何であるか定まらない時期で、私はドストエフスキイの『罪と罰』や、ニーチェの『ツアラツーストラはかく語りき』などを読み耽つた。「おお我が魂よ、起き上がるがいい。心の扉を開け。太陽の光に向かつて、その窓を開けよ。そして広い世界に眼を挙げよ。我は光に満ち溢れるであろう。——昭和二〇年十一月二十五日日記より」。昭和二十年秋は、多くの学生は解放の喜びに溢れていた。その心の中にあるものは、不満ではなくて、どこに自分の考え方の基本を定めるかという積極的な悩みであつた。

## 矢内原忠雄講演会「日本の傷を医す者」

昭和二十年十二月二十三日、新橋田村町の飛行会館で、矢内原忠雄先生の「日本の傷を医す者」という講演会があり、夜、私は父と一緒に、この講演会に出かけた。田

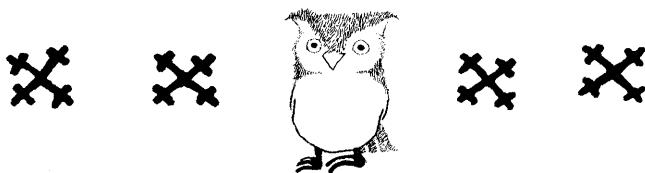
村町の角の虎の門寄りにNHKのビルがあり、その新橋側の向かいに飛行会館の茶色いビルが焼けのこつっていた。たしか、三階の講堂であった。植民地政策を専攻していた矢内原忠雄は、日本の満州政策を批判したために軍部からにらまれ、昭和十一年十二月に東大を追われ、昭和二十年十一月に東大に復帰されたばかりだった。この講演では、冒頭から旧約聖書エゼキエル書三十七章が朗読された。谷に満ちた「枯れた骨」に神の息が吹きかけられると、骨が音を立てて動き、肉がつき皮がついて生き返り立ち上がつたというエゼキエルの幻と言われる箇所である。戦死した若者達の骨が野山に散乱しているというのは、当時の日本の現実そのものだった。「骨は枯れ、望みは絶え果てたとき、主なる神はこう言われる。息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ。神の息が入ると、彼らは生き、その脚で立ち、はなはだ大いなる群衆となつた。」とエゼキエル書は記す。戦死した人々のみでなく、空襲で、原爆で死んだ人々の骨が満ちていた。この日本の現実の中で、この人々の死を無駄にするのでなく、私共がそれを意味あるものと考えるのにはどうしたらいいのか、それは、無事に戦争を生き延びた人々の切実な精神的課題だった。枯れ





た骨が生き返るという希望がもてなかつたら生きていかれない、このようにでも考えなかつたら、友人たちの死と積極的に向き合うことはできないのではないかと、私はこの箇所に納得した。その後、私は、今井館聖書講堂で毎週日曜日の午前に矢内原忠雄先生の聖書講義に通うことになり、その同じ場所で午後から、近所の子ども達を集めて日曜学校をすることになるのだが、これについては後に述べる。

矢内原忠雄は、「この慘憺たる敗北」「國家の独立の実質的喪失」の原因として、この講演で三つをあげられた。第一は、一九二二年のワシントン条約に違反した満州事変である。正義（国際条約）に反した国家の行動が神からは認される筈はない、しかし人々はこれをただ利益問題としてしか考えなかつたことが日本の政治が犯した誤りである。第二には、満州事変の少し前から、軍国主義者は、国粹主義的国体論、天皇陛下は神であるという考え方を作り出し、それをもつて日本国民の精神を圧迫し、それを否定する言論を圧迫したことである。「片言隻句をとらえて不敬罪として処罰し」、「天皇を神として崇める信仰を己れ自身もたずして、他人の思想を圧迫する手段として用いた」。言論問題によつて大学を追放された矢内原の骨身に染みた体験である。虎の威を借りて自分に都合のよい論を通す、下士官の論理であり、昔から、根強くある日本社会の性格である。昭和二十年には、多くの人はその通りだと思った。それから五十数年たつた現在、同じことが起こつてゐるのはどうしてなのだろうか。そ



昭和二十年の暮、もう戦争中の灯火管制はなかつたが、クリスマスというのに、新橋界隈は暗くて寒かつた。目黒駅から家まで殆ど焼け野原の暗い道を、オーバーの襟を立てて、父と語りながら家に帰つた。

昭和二十年は、空襲で家を焼かれ、私自身は兵隊に行き、戦争が終わり、そして平和が来た、激動の年だつた。十二月三十一日の私の日記には、「苦難に満ちた昭和二十年よ、さようなら」と記してある。苦難の年だつたが、その反面解放の喜びをも味わつた日本歴史の中で特別な年であつた。私自身、青年期にこの年を過ごしたことを見うとき、人間の一生は歴史の中にあることをあらためて認識させられる。

昭和二十一年一月十五日の日記には次のように記してある。「自分はこのまま眠つて過ごせる存在ではない。世界の上に立つて動く歴史的存在である。この世界の上に確固として立とう。それゆえに乱脈な存在ではない。何かに向かって進む永続的存在である。すべからく然るべく行動せよ。」

### 南原繁総長の演説

昭和二十一年二月十一日、紀元節の日、南原繁が東大総長になつて演説があるといふので、学生達は続々と安田講堂に集まつた。南原先生は、戦時中大学を追われるところはなかつたが、内村鑑三の弟子であり、『国家と宗教』の著者であり、孤高の学者

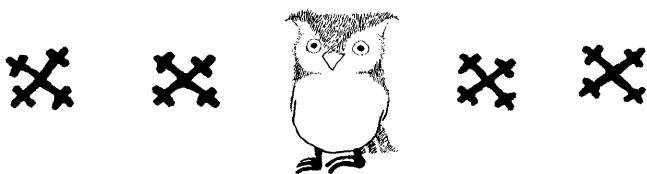


として私共は知つてゐた。南原先生は、東大総長となつて以来、式典のたびに講演され、その講演集は、『祖国を興すもの』（帝国大学新聞社出版部 昭和二十二年）『真理の闘ひ』（東大綜合研究会出版部 昭和二十四年）として出版されている。いまは黄色くなつたザラ紙の書物であるが、その後五十年以上私の机の脇の本棚に置いて来た。たとえ専門の講義に欠席しても南原先生の演説される式典には出席すると決めていた学生は多かつた。私もそのひとりである。いま、ザラ紙の講演集をめくりながら、当時の精神的雰囲気を紹介してみよう。

その最初の講演は「新日本文化の創造」と題し、我が国の敗戦と崩壊の後、最初の建国記念の日になされた。演説の趣旨は次のようである。「今日の我が國の破局と崩壊は、軍閥や一部政治家の無知と野心のみでなく、因つて来るところは深く国民自身の内的欠陥にある。それは何かというと、我が国民には熾烈な民族意識はあつたが、おののが一個独立の人間としての人間意識の確立と人間性の発展がなかつた。個人は国という観念のわくにはめられて、人々の人間性の発展がなかつた。」と言う。

第二には、「人間性の発展だけでは不十分で、人間主義の内面をさらに突き詰め、そこに横たわる自己自身の矛盾を意識し、ここに人間を超えた超主観的なる絶対精神——『神の発見』——とそれによる自己克服が必要である。

第三には、ナチスードイツとの比較である。「ナチスは真正ドイツ精神にとつては



異質なものを持み、本来のヨーロッパ精神から離反している。それに対し、日本は我が国固有の伝統と精神を賭けて戦った故に、その精神 자체が壊滅した今、何を以て祖国の復興を企て得るであろうか。過去の歴史に求め得ないとすれば将来に於いて創り出さねばならぬ。」それは可能かを問う、「私は然りと答える」と南原は言う。「まず各自が自分の心に問い、その全人格を集中して眞面目に思惟せられよ。余人はどうであろうとも恰も自分がその責任を有するかのごとく決意せられよ」と。この時期、大学には応召学徒たちが戻り、五年間位にわたる先輩、後輩が等しく同じ条件のもとに学んだ。一般社会でも、軍人は勿論、政界も財界も、年長者の多くが公職追放になり、そのため私の世代は実質的に先輩のいない生意気な世代になつたのではないかと思う。

「ポツダム宣言はわが民族の殲滅を要求するものではない。やがて形作らるべき世界秩序に蘇生せられた平和民族として文化と人類に寄与する道は残されている。」と南原総長は結ばれた。戦争という大きな犠牲の上に可能になつた新しい道である。この考えがこのときほど広く受け入れられた時代はなかつたのではないかと思う。丁度このころ、教育刷新委員会で教育基本法の原案が作られつつあった。南原繁をはじめ、倉橋惣三もその委員のひとりだった。「新日本文化の創造」の思想は委員たちに共有されていたことは確実である。将来も、これを基本にし、これを具体化してゆけばよ



い。

昭和二十一年三月三十日には、東大安田講堂で戦没並びに殉職者慰靈祭が行われた。なぜこの日が選ばれたのかを私は知らないが、南原総長の「戦没学徒を弔う」という演説があるというので、安田講堂は通路まで満員だった。いまだ帰還しない学友達を思い、何はおいてもこの式典には出席したいと多くの学生達は考えたのだと思う。この日、南原総長は特別にゆつくりと、一語一語かみしめるように語られた。私の耳の底にはあの語調がいまも留まっている。この日の演説は、式典の性格からも、紹介するのにやや情緒的になることを避けられないが、これを飛ばして戦後は語れないので、演説を引用しながら紹介することを許して頂こうと思う。（文中、現代に分かりやすく、また短縮するために、漢字をかえたり、文章の一部を抜いて結び付けたところがあることも許して頂きたい。）

演説の冒頭、「今次大戦に於いて出陣したるのみ永久に還らぬ若き同友学徒諸君のため、ここに哀しき記念の式を挙行せんとして、感慨尽くるところを知らない。」と先生は語り始められた。「顧みればこの幾歳月、われわれ国民は何處をどう辿り来つたか。混沌錯乱、恰も模糊たる夢の中を彷徨しつつあつた如くである。併しそれにしては余りに厳しき歴史の現実であり……」明治維新の開国以来、富国強兵、国権の拡充の八十年の結末として、何十万という人の死を伴つた歴史の審判の現実だった。



「軍閥・超國家主義者等少数者の無知と無謀と策謀さへによつて企てられたただ戦争一途と、そして没落の断崖目がけて国を挙げての突入であつた。」「忘れもせぬ先年十一月学徒一斉出陣の秋、いかに愛国奉公の情熱に燃えて、諸君は勇躍して我らの許を立つたか。諸君は徒に独断狂信的なる『必勝の信念』を以て闘つたのではない。……」

「憶へば諸君のうちには、いよいよ戦地に出発するといつて、倉皇の時の間を我々のもとを訪ねてくれたのも永遠の別離であつた。また諸君が陣中より切々の純情を綴つて送つてくれた書簡に我ら幾たび涙したか知れぬ。我らしばしばその一人一人の名を呼んで天地に訴えたい衝動をどうすることもできぬ。今次の戦争が無名の帥（いわれのない出陣）であつただけに、人間として同胞として転た痛嘆と同情に堪えぬものがいる。……諸君はわれらに向かつて語るごとくである。『今にして誰を恨み誰を咎めようぞ。全学全国民心を一にして祖国再建の事業にあたられよ。これわが永世の悲願である』と。」ここまで語られて全講堂は肅然として声もなかつた。「諸君のかつて幾度か集まつた思い出多き講堂、別しても先年全学の壮行会を開いてここから出で征いたその同じ場所に於いて、今日追悼記念の式を挙ぐるに当たり、諸君の靈は必ずや帰り来たつて此處にあるであろう。その英靈を囲んで、学園にふさわしく何の宗教的儀式をももたぬ純一無雜な慰靈祭に於いて、不肖ながら自ら祭主ともなつて執り行つた我らの衷情を諸君はきっと酌んでくれるであろう。」「いまわが心の悲しみ拙詠一首挽

歌として靈前に捧げたいと思う。

桜花咲きのさかりを益良男（ますらお）の　いのち死にせば哭かざらめやも

戦いに死すともいのち甦り　君とことはに國をまもらん

親愛なるわが若き同友学徒の靈よ、こねがわく冀は饗けよ。」

演説が結ばれたときには、男たちが声をあげて泣いた。

あの講堂を満たした号泣は何だったのか。戦死した友への悲しみも勿論あるが、それ以上のものがあったと思う。二度とあのような戦争を起こしてはならないとの決意である。どうしてあの時代が来たのかとの問い、日本にだけ通用する哲学——個人の人格の尊厳を考えない思想——への反省など、過去と未来への真摯な思いがこめられていた。昭和二十一年、この後、戦後の第二の時期に入る。

私はこの時代をあまりに直線的に描き過ぎたかもしれない。一人ひとりの心中はそれぞれにもつと複雑であろう。しかし、心の底にはこのような時代を共にした同時代人に共通の心情があつたと私は信じている。その時代が通り過ぎようとしている現在、その時代精神を記しておかねばならないと書き記した。そして私が幼児教育を志したのも、この時代の中でのことである。

